様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２６３５

研究課題名（和文）伝統的『楚辞』解釈の再検討

研究課題名（英文）Reexamining the Traditional Interpretation of "Chuci"

研究代表者
田島　花野（TAJIMA, Kaya）

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：７０７５７９９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、後漢・王逸による楚辞の注釈『楚辞章句』を、以下の四分担から多角的に分析したものである。
（１）「漁父」・「卜居」・「招隠士」王逸注の押韻を検討し、成立の時期や成立過程の一端を明らかにした。（２）屈原イメージについて歴代『楚辞』注釈書を分析し、楚辞解釈の変遷・継承の概略をまとめた。（３）「離騒」テーマに関して、北宋・洪興祖『楚辞補注』、南宋・朱熹『楚辞集注』との比較分析を行い、王逸注が楚辞学史に果たした作用を解明した。（４）前漢・劉向「九歎」、王逸「九思」など漢代楚辞作品の考察や、漢代『詩経』注釈・春秋学との関連性の検討を通して、王逸注を漢代の学術および文芸の中に位置付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦国時代に発生した『楚辞』は、『詩経』とともに中国・東アジアの文学・思想に多大な影響を与えてきたが、少数の出土文献を除けば当時の資料はほとんど残っておらず、伝世文献を通じて原貌を探るほかない。伝世文献は歴代の書物編纂の影響を受けており、とりわけ『楚辞』本文が現在に伝わる形に編纂され注釈が付された漢代の状況は無視できない。
本研究は、『楚辞』編纂と注釈の最も初期の段階において、どのような営為がなされたかを多角的に解明した点に特色がある。楚辞学、漢代学術史のみにとどまらず中国古典文学研究を深化させ、ひいては中国思想史・言語学研究の発展にも寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：This research is a multi-faceted analysis of "Chuci zhangju" by Wang Yi in the Later Han Dynasty, based on the following four divisions.
(1)We clarified the time and the process of the commentary on "Yufu", "Puju", and "Zhaoyinshi" establishment by examining the rhymes of them.(2)We analyzed successive commentaries on "Chuci" about the image of Qu Yuan, and summarized the transition and inheritance of the interpretation of "Chuci".(3)Regarding the theme of "Lisao", we conducted a comparative analysis with "Chuci zhangju", "Chuci buzhu" by Hong Xingzu in the Northern Song Dynasty and "Chuci jizhu" by Zhu Xi in the Southern Song Dynasty, and clarified the effect of "Chuci zhangju" on the history of "Chuci".(4)We have placed "Chuci zhangju" in the academic and literary of the Han Dynasty,through consideration of "Chuci" works, such as Liu Xiang's "Jiutan" and Wang Yi's "Jiusi", and examining the relevance between the commentary on "Chuci","Shijing" annotations and "Chunqiu" studies.

研究分野：中国文学

キーワード：楚辞　漢代　章句　注釈　王逸　詩経　春秋

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

『楚辞』は、屈原の作品を主とする歌謡集とされてきたが、実はそれは後の漢代の理解に基づく。そこで本研究では、漢代の『楚辞』解釈の成立と展開、後世における評価の解明をめざした。『楚辞』本文に関する研究は、思想・歴史・文学・語学・出土文献など各方面から、すでに行われている。しかし、『楚辞』の伝統的解釈の根幹となる王逸『楚辞章句』をはじめとした漢代の注釈が、いかなる背景の下に制作され、漢代の文学や学術にどのように影響したか、また後世の『楚辞』解釈にどのように受容されたかの研究は、いまだ十分には行われていない。そのため本研究では、思想・歴史・文学・語学等の多角的な視点から『楚辞』解釈を再検討することで、楚辞学の成立と展開を解明することを目指した。

２．研究の目的

漢代の楚辞学について、日本国内での先行研究は王逸注の成立過程や執筆態度の考察が主であり、王逸注そのものの詳しい分析は十分とは言い難い。中国では、出土資料を用いた研究に進展があるほか、基本資料の出版が相次ぎ、楚辞研究の根幹となる資料が整備されつつある。

本研究は、基盤研究(B)「中国古代戦国期における楚文化の学術的研究—中原との関わりに着目して——」（2009 年～2012 年、代表者大野圭介）を直接に受けて構想されたものである。同プロジェクトの研究成果である大野圭介主編『『楚辞』と楚文化の総合的研究』（汲古書院、2014 年）によって、戦国期の『楚辞』を取り巻く状況が明らかとなったが、 戦国期の検討を主眼とするため、続く漢代に関する研究は必ずしも十分でなかった。本研究は考察の対象を漢代の『楚辞』解釈に移し、同プロジェクトの研究成果を更に発展させるものである。

３．研究の方法

(1)王逸注の押韻についての検討を通して、成立の時期と成立過程を明らかにする（田島）。
(2)王逸注に見える屈原イメージを分析し、その成立過程を明らかにする（矢田）。
(3)歴代『楚辞』解釈の分析を通して、王逸注が楚辞学史において果たした作用を解明する（田宮）。
(4)漢代『詩経』注釈と王逸注との比較を通して、王逸注の漢代学術における位置を探る（大野・谷口）。

４．研究成果

(1) 王逸注の押韻（田島）

本分担では『楚辞章句』王逸注の押韻を羅常培・周祖謨『漢魏晋南北朝韻部演変研究』（科学出版社、1958 年）（以下「羅著」と称する）と詳細に比較検討することにより、成立時期や成立の過程を明らかにすることを企図した。

まず、2018 年の論文「『楚辞章句』「卜居」注の押韻」では本文の押韻と注の押韻に対して基礎的な分析を行った。「卜居」では原則として本文一句に対し「○○◎也。」（◎は押韻字）形式の一句の注が付される。注は単独で朗誦しても意味をなさず、「本文一句、注一句。本文一句、注一句。…」のように本文と交互に朗誦されたとされているが、本文と交互に朗誦すると本文の複雑な押韻の効果を弱めてしまうため、本文と交互に朗誦するという説には疑問が生じた。また、「卜居」注の中に前漢では押韻し後漢では押韻と見なせない一例があることを発見した。

続いて、2019 年の論文「『楚辞章句』「漁父」注の押韻（付）「卜居」注の前漢音」では、羅著「両漢詩文韻譜」所収の押韻例を詳細に分析することで、「漁父」注に見える韻部を跨ぐ例や平声と去声など声調を跨ぐ例について、押韻と見なせるとの確証を得た。また、前稿で挙げた「卜居」注の前漢音一例に関して、漢代二十七韻部だけでなく『広韻』二百六韻目についても羅著と対照し、偶然押韻しているように見えるのではなく確実に前漢音であり、前漢期には成立間もない「卜居」本文に対して既に注釈活動が始まっていたことを明らかにした。

さらに、2023 年中国屈原学会での発表「《楚辞章句・招隠士》中散体注的押韻」では、「招隠士」注の一見したところ散文形式であるが押韻する可能性のある箇所を考察し、四例中二例は後漢の押韻の特徴を持つと結論付けた。

なお、当初の計画では王逸注の成立した地域に関しても検討を予定していたが、漢代音において地域差は存在するものの前漢・後漢の時期の違いに比べると判定が困難であることから、本分担での検討を断念した。

『楚辞章句』は王逸の著とされてきたが、前漢の押韻例と後漢の押韻例の双方を含んでおり、王逸以前の注釈を取り込んで成立したものと言える。『楚辞』作品への注釈活動は前漢期から後漢期まで段階的・継続的に行われており、『楚辞』に関する伝承も連綿と受け継がれてきたであろうことが伺える。

従来の音韻研究では専ら詩文の本文が対象とされてきたが、『楚辞章句』の注の押韻部分も音韻研究の材料に加えるべきであることを強調したい。本分担を遂行する過程で羅著の押韻例を用いた押韻の判定方法を確立することができた。今後は『楚辞章句』の散文の中に韻文が取り込まれた注釈形式に関しても、押韻の有無や前漢・後漢の成立時期等を判定することが可能となった。

(2) 王逸注に見る屈原イメージの形成（矢田）

後漢の王逸『楚辞章句』における屈原イメージの形成を、具体的な注釈例を取り上げつつ論じ、明らかにすることを試みた。研究開始当初は、楚辞「遠遊」等の王逸注に、屈原を道家的な得道者とみなす箇所があることに注目し、王逸が生きた後漢当時の思想的背景を念頭に論じようとしたが、用例や資料が限られていることから断念した。次に、王逸注が楚辞本文の意味内容から逸脱し、作品を強引に忠臣屈原と楚懐王の物語に結びつけ、屈原を儒家的な理想の人物として描こうとしている点に着目し、それが特に顕著に表れている楚辞「九懐」諸篇を取り上げて考察した。その研究成果は、2019 年の楚辞学国際学術討論会暨中国屈原学会第 18 届年会において「《楚辞・九怀》的远游描写和王逸注」と題して口頭発表し、その際に提出した論文は『中国楚辞学』第 29 輯（学苑出版社、2021 年）に掲載された。また、王逸『楚辞章句』、朱熹『楚辞集注』、浅見絅斎『楚辞師説』を取り上げ、王逸注が屈原の儒家的人物像を強く印象付けた結果、南宋の朱熹や日本江戸期の儒者である浅見絅斎が、自身の不遇と屈原のそれとを重ね合わせ、自らに儒家的屈原イメージを重ねて注釈を施すことに繋がった点について論じた。その研究成果は、「時空を超える『楚辞』」と題してまとめ、『つなぐ世界史 1 古代・中世』（清水書院、2023 年）に投稿し、掲載された。

(3) 王逸注が楚辞学史に果たした作用（田宮）

本分担は、今日に伝わる最古の楚辞注釈書であり、楚辞および屈原理解の原点であり続ける（後漢）王逸『楚辭章句』が楚辞学史において果たした作用を解明することを企図したものである。手法としては、楚辞を代表する作品「離騒」を選び、王逸注を貫く「離騒テーマ」を軸に、王逸の注解と、王逸注と並んで古典三大注を構成する（宋）洪興祖『楚辭補注』、（南宋）朱熹『楚辭集注』との比較分析を行い、王逸注との継承関係および距離を明らかにし、その要因を考察した。

結論として以下二点を指摘出来る。『章句』は先秦から漢代に至る楚辞に関する知識と理解を集大成し、今日に至る古典的基盤となった。『補注』は『章句』の基盤を補充し、『集注』は二注の成果を受け継ぎ、総括した上で、一定の止揚を行っている。これが三大注の関係の基調である。次に、『章句』を強く特徴づける「離騒テーマ」については、『補注』まで継承されたものが『集注』で距離が生じる、或は『補注』で継承されず、『集注』にそれが引き継がれる、というように、後に行くほど距離が生じている。

『章句』「離騒テーマ」は、論文中で明らかにしたように、王逸が「離騒」を「忠臣の君への訴え」として読むところから生じている。『補注』から『集注』へと生じる「離騒テーマ」からの距離の要因には、作品が説くところを字義や文脈に則して読みとろうとする姿勢と、君主に対する非難を回避しようとする姿勢の２点が指摘できる。この２点はどちらも、後漢に成立した『章句』に対し、宋代という『補注』と『集注』が成立した時代の学術思想および政治思想と密接に関係しているであろう。

なお、今後に残る課題としては、本研究に先立って考察した、（清）林雲銘『楚辭燈』との比較の上では、これら古典三大注が総体として共通点を呈することがある。時代が下るにつれて、民間経済が発達し、『章句』「離騒テーマ」の核心を為す「登用」からの文人層の自由度が相対的に増すことが「離騒」の読解に本質的な変容をもたらしているのではないかと考えるが、明清期の「離騒」読解の特徴については今後の課題としたい。

(4) 漢代詩経学と王逸注（大野・谷口）

大野の担当である漢代『詩経』注釈と王逸注との比較について、まず王逸の楚辞作品「九思」についての検討を行い、2017 年中国屈原学会での発表「王逸《九思》考」及びこれをもとにした論文「王逸『九思』考」において、王逸が「九思」の中に『詩経』特有の表現をも盛り込むことによって、辞賦に押されて衰退しつつあった楚辞文芸を経書並みの地位に高めて復興しようとしていたことを明らかにした。

次いで、2019 年度中国屈原学会での発表「論王逸引《詩》」及びこれをもとに改稿した論文「王逸『楚辞章句』における引詩について」において、王逸『楚辞章句』には『詩経』の引用が他の諸書の引用よりも群を抜いて多く、この点からもまた『楚辞』を『詩経』と同等の経書に高めようとする意図が認められることと同時に、これが結果的に楚辞文芸の「経」としての固定化をもたらし、その表現や精神は他の文学ジャンルに継承されて変化発展していったことを明らかにした。

また、『詩経』と『楚辞』の解釈が互いに影響し合っていたことを解明した研究としては、口頭発表「論《詩経》古注的恋愛詩解釈」において、上海博物館楚簡『孔子詩論』で妻を待つ歌と解している「采葛」が古注で君王を待つ歌と解していることに、『楚辞』とりわけ「離騒」で女神への憧憬が君王への忠誠に転化して解されたことが影響している可能性を論じた。

さらに『詩経』以外の経書が『楚辞』の流伝と解釈に影響した可能性として、2023 年中国屈原学会年会での口頭発表「从“楚词”到《楚辞》—汉代楚辞文艺的传播与《春秋》—」及び発表予定論文「「楚詞」から『楚辞』へ——漢代における楚辞文芸の伝承と『春秋』——」において、漢の武帝期に『楚辞』を中原に伝えた厳助・朱買臣をはじめ、『楚辞』を伝承したり章句を施したりした人物の大半が春秋学、特に穀梁学や左伝学を学んでいたことから、「離騒」や「天問」に描かれる歴史の叙述が、『春秋』を補うものとして『春秋』とともに伝承され、さらに春秋学における君臣の義の解釈が『楚辞』を「懐王ー屈原」の君臣の義を表すものと捉える解釈に影響した可能性を論じた。当初意図していなかった方向ではあるが、『楚辞』伝承研究に新たな道筋が開けたことは大きい。

谷口は、王逸『楚辞章句』所収の漢代の模擬的作品のうち、最後の二つの巻を占める劉向「九歎」と王逸「九思」をとりあげ、楚辞の漢代における展開について考察した。

「九歎」は、屈原の名で伝わる「九章」が多様な作品を寄せ集めたとおぼしいのに対し、はじめから周到な意図を持って作られた組詩である。形式上は「離騒」体の本文と「懐沙」体の乱との組み合わせで統一され、『史記』屈原賈生列伝にも言及されたこの二篇への重視がうかがえる。また内容上は、九つの篇が、現実界での苦難と二度の天上遊行という「離騒」の筋書に沿って排列されている。すなわち「九歎」は、楚辞の模擬的作品を漫然と集めたものではなく、屈原の代表作である「離騒」の世界を、「離騒」のスタイルをとりつつ、楚辞の伝承における聖數である「九」によって表現したものであり、劉向による理想的楚辞世界の再構成といえる。

注目すべきは、「九歎」には漢代の故事を詠み込んだ箇所もあり、単なる楚辞の模倣を超えて、作者劉向の自己表白に一歩を踏み出していることである。これは擬作としての弛緩というよりは、一人称文学である「離騒」の世界を追求したことの結果とみるべきだろう。後漢から魏晋にかけて、騒体によって一人称で自己を語るタイプの賦が盛んに作られるが、「九歎」はそのさきがけとなっているのである。

一方「九思」は、「九歌」体によって統一されており、そのため一人称の自己表白ではなく、三人称の描写的文学になっている。ただし「九歌」のような天界の絢爛たる描写があるわけではなく、対象はあくまで屈原の苦悩に終始する。また「離騒」に見られた「怨」の感情は後退し、「悲」「哀」といった語が多用される。

これらの点は、作品としての力をそぐものと見られがちだが、重要なのはそれが王逸の立場を如実に反映していることである。騒体による自己表白の文学が、楚辞の模倣を離れて一つのジャンルを確立しつつあった後漢の中期において、王逸にとっては、むしろ「九歌」体で屈原を描写することこそが、楚辞の本質に迫る方法だったのである。すなわち、一人称で屈原になりかわってうたうよりも、三人称で屈原に寄り添うようにうたうことを選んだのである。その態度は、屈原の後継者とされる宋玉に通じるものがある。「怨」の後退と「悲」「哀」への沈潜は、すでに宋玉に見られるものであるし、同時に班固の屈原批判に対する応答でもあった。こうした王逸の立場は、『楚辞章句』を著した注釈家でもある彼にまことにふさわしいものである。

これらの論は、中国屈原学会にフルペーパーを提出した上で口頭発表を行い、論文は『中国楚辞学』に掲載された。あわせて、前漢における屈原への言及が、実際にはむしろ宋玉に連なるものであることを、「宋玉コンプレックス」と名づけて論じ、これも中国での口頭発表を経て論文を公刊した。

これらの成果をふまえ、「九歎」と「九思」の二つの立場を俯瞰した論文の執筆を構想したが、これは研究期間中に完成することができなかった。ただ、漢代における楚辞の展開はもとより、楚辞と辞賦の関係について究明する糸口を得ることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 田島花野	４．巻 24
２．論文標題 『楚辞章句』「漁父」注の押韻（付）「卜居」注の前漢音	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東北大学中国語学文学論集	６．最初と最後の頁 37,60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田宮昌子	４．巻 27－1
２．論文標題 『楚辭』三大注の注解姿勢の比較―王逸「離騒テーマ」を中心に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	６．最初と最後の頁 65,76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田島花野	４．巻 23
２．論文標題 『楚辞章句』「卜居」注の押韻	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東北大学中国語学文学論集	６．最初と最後の頁 1,16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大野圭介	４．巻 70
２．論文標題 王逸「九思」考	５．発行年 2019年
３．雑誌名 富山大学人文学部紀要	６．最初と最後の頁 380,402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷口洋	4．巻 37－1
2．論文標題 試論西漢士人的宋玉情結	5．発行年 2017年
3．雑誌名 信陽師範学院学報（哲学社会科学版）	6．最初と最後の頁 1，5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大野圭介	4．巻 77
2．論文標題 王逸『楚辞章句』における引詩について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 富山大学人文科学研究	6．最初と最後の頁 288,273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大野圭介	4．巻 9
2．論文標題 「楚詞」から『楚辞』へ――漢代における楚辞文芸の伝承と『春秋』――	5．発行年 2023年
3．雑誌名 桃の会論集	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢田尚子	4．巻 29
2．論文標題 《楚辞・九懐》的遠游描写和王逸注	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中国楚辞学	6．最初と最後の頁 111,123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口洋	4．巻 30
2．論文標題 《九思》与王逸所処的立場	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中国楚辞学	6．最初と最後の頁 495,508
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口洋	4．巻 28
2．論文標題 論劉向的《九歎》――西漢擬騒的帰結、東漢魏晋騒体賦的濫觴	5．発行年 2021年
3．雑誌名 中国楚辞学	6．最初と最後の頁 371,377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　13件）

1．発表者名 大野圭介
2．発表標題 論王逸引《詩》
3．学会等名 2019年中国汨羅屈原及楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十八届年会（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 田宮昌子
2．発表標題 囲繞《章句》離騒主題的発展和演変問題来対比楚辞《章句》《補注》《集注》的注釈態度
3．学会等名 2019年中国汨羅屈原及楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十八届年会（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 谷口洋
２．発表標題 〈九思〉与王逸所処的立場
３．学会等名 2019年中国汨羅屈原及楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十八届年会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 矢田尚子
２．発表標題 〈楚辞・九懐〉的遠遊描写与王逸注
３．学会等名 2019年中国汨羅屈原及楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十八届年会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大野圭介
２．発表標題 王逸《九思》考
３．学会等名 屈原及楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十七届年会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 谷口洋
２．発表標題 論劉向的《九歎》――西漢擬騒的帰結、東漢魏晋騒体賦的濫觴
３．学会等名 屈原及楚辞学国際学術研討会暨中国屈原学会第十七届年会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 大野圭介
２．発表標題 論《詩経》古注的恋愛詩解釈
３．学会等名 第13届詩経国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大野圭介
２．発表標題 从“楚詞”到《楚辞》―漢代楚辞文芸的伝播与《春秋》―
３．学会等名 2023年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第19届年会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 田島花野
２．発表標題 《楚辞章句・招隠士》中散体注的押韻
３．学会等名 2023年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第19届年会（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 岡美穂子編	４．発行年 2023年
２．出版社 清水書院	５．総ページ数 248
３．書名 つなぐ世界史1（古代・中世）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大野　圭介 (Ohno Keisuke) (30293278)	富山大学・学術研究部人文科学系・教授 (13201)	
研究分担者	谷口　洋 (Taniguchi Hiroshi) (40278437)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	矢田　尚子 (Yata Naoko) (10451494)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	田宮　昌子 (Tamiya Masako) (70316199)	宮崎公立大学・人文学部・准教授 (27601)	
連携研究者	野田　雄史 (Noda Takeshi) (10325566)	長崎外国語大学・国際コミュニケーション学部・准教授 (37304)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関